

## 「ほの国」を知るためのプロジェクト」活動記録 02

ここでは“自主活動日”を記録しています。2021年11月からスタートしたりサーチプロジェクトは、月1回の正式な活動日の他に、少人数で身軽に行う“自主活動日”としてさらなるフィールドワークや展示に向けた作業を行ってきました。興味関心の赴くままにあちこち見て歩き、話を伺い、資料を手繰り、素材を採集し、そしてそこから得たモノゴトを掛け合わせて新たな交易品や展示物を作っていました。ここにも載せきれなかった活動がまだまだありますが、約半年間、時間と労力を費やしながらかこの土地と向き合っていくことで生まれてきたプロジェクトの内容を少しでも多く記録・共有できればと考えています。井上唯

2021年

12月7日(火)

フィールドワーク @加藤竹箆店、牛川の渡し(豊橋市)など

この土地を掴むため、まずは気になるところへ手当たり次第に行ってみる。この日は、今でも手作業で竹細工をしている加藤竹箆店と、豊川に唯一残る牛川の渡し船に乗りに行く。

魚の形を崩さずに佃煮を作るのに使用する竹の六つ目編みを束ねて出荷するところに出くわす。編みの上に魚を並べ、鍋に沈めて煮て、そのまま取り出すことで煮崩れしないという。最近は注文も減ったが、昔は正月前になるとハゼの佃煮を作るために佃煮屋からたくさん注文がきたそう。で、何かに生かせそうだと思う一つ購入する。店の前面床にゴザが敷かれて作業場になっていて、竹と藤の素材や道具が並ぶ。修理を待っている藤の乳母車も。

渡し船では、船頭さんが船上を行ったり来たりしながら長い竿で川底を押しやってゆるゆると進んでいく。奈良時代に都へ続く官道が豊川を横断するルートで整備されて以降、道筋や渡河点を変えつつ交通の要衝であり続けた。江戸時代には内陸と海岸をつなぐ物資・文化の運搬路として発展し、通船が始まった16世紀以降には各地に河岸が生まれ、積荷を積んだ帆掛船や川船が豊川を行き交った。そんなかつての賑わいが遙か遠くに感じられ、長い時間の流れを感じた。



12月8日(水)

フィールドワーク @渥美半島各所

車で走りながら、目に留まったところを気ままに散策。この日は、日出の石門、伊良湖岬、西の浜、JRA(火力発電所)、福江港、伊良湖ビューホテル、三河港など渥美半島をぐるりと巡る。

内海の福江港近くの海中に海苔養殖の粗朶(ソダ)が張られていた。寒風吹き荒ぶ中、腰まで海に浸かって「まんが(長い柄のついた籠)」を地面に突き立てて砂を掬っては海中で揺すってアサリ漁をしている人も発見。また、そんな海辺の風景と隣り合わせてキャベツ畑やビニールハウスが広がっており、かつての半農半漁の風景を思い起こさせる。

伊良湖水道を挟んで太平洋の海岸と三河湾が一望出来るホテルの展望温泉で、海上を行き交う船やタンカーを見ながら湯に浸かっていると、おばさまたちが三河湾は車の出荷が多く、外車の輸入は全国一だと話していた。



2022年

1月11日(火)

トヨタの社宅の解体現場で撮影&瓦礫をもらう @豊橋市富士見台

実家のあるニュータウンに林立していたトヨタ自動車の社宅群の取り壊しが始まり、その瓦礫を採集しに行く。

私が生まれ育った町には、三河湾を埋め立てた工業地帯にできたトヨタ工場で働く人々が住む社宅が建ち並び、それが増えるにつれて町も大きくなっていった感がある。色とりどりの社宅とその敷地は子供たちの遊び場でもあった。それが近年の需要減少と老朽化のためか次々と取り壊され始めた。町を彩っていた桜並木も根こそぎ倒され、自分の原風景が時代の流れによって大きく変えられていくショックがあった。解体されたコンクリートの瓦礫には砂利が練り込まれており、開拓や埋め立て、河川や海での浚渫工事など、人が自然に手を加えることで土地や風景を変えてきた歴史も含んでいる気がして、ひとまず採集しておく。半年後には完全な更地となった。







3月11日(金)

### 打ち合わせ @豊橋市民俗資料収蔵室

発表に向けて作業ができる場所をほの国のエリアで探していると、メンバーが旧多米小学校校舎を利用した豊橋市民俗資料収蔵室の情報を入手。木造平屋の校舎に収蔵された民俗資料を公開するだけでなく、校庭や教室が地域の活動の場として活用されているということを見つけ、管理している豊橋市美術博物館に相談。土地の素材や手法を採取しながらモノを作っていくにあたって、土地の民具が傍らにあるのは願ってもない環境だと感じる。また、地元の方のお話を伺ったり、作業を手伝ってもらえたらと期待も込めて使わせて頂くことに。土日のみの使用に限られていたので、平日は、豊橋市内にある祖父母の倉庫をひとまずの作業場・素材置き場に。



3月21日(月)

### 流木や漂着物の採集 @百々海岸、伊良湖岬、西ノ浜

渥美半島の外海の海岸で漂着物を採集しているときに、波で丸くなった砂利入りアスファルトの塊を拾う。自然と人工、陸と海を行き来する、間（あわい）の豊さを表すような存在。そのあと、メンバーたちと合流して、“流木倉庫”と勝手に命名した伊良湖岬に展示に使うための大きな流木を拾いに行く。力強い波風によって、行くたびに巨木が移動している。地元の老夫婦が岩場の浅瀬に入って海藻を採っており、腰に結わい付けた自作の大きな網袋に次々と入れていく。この後、浜辺に広げて乾燥させて保存するとのこと。かつての「浜拾い」による海辺の資源活用的一端が垣間見える。



4月10日(日)

### 祭祀の見学 @菟足神社

田植え神事を見る。葉付きの細竹を四隅に立て、藁縄を張って紙垂を付け、そこに持ち運び式の簡易な祭壇をしつらえて祝詞があげられ始める。身の回りにある素材を上手にを使って、一時的に「場」を出現させており、祭祀のカタチや在り方に改めて感心する。



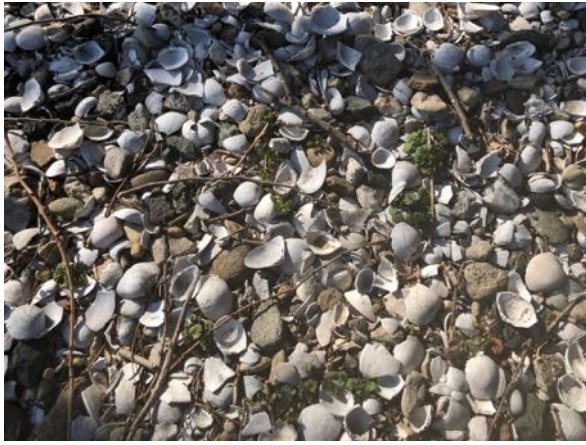
### 素材の採集 @平井稲荷山貝塚

神社のこんもりとした境内へ上がると地面にたくさんの白骨化した貝殻が落ちている。まさかと思いながら夢中で拾ううちに土器片もちらほら見つかる。後日、縄文土器片だと判明。貝殻は時代が新しそうなのもあり不思議に思っていたが、貝塚自体が縄文時代だけでなく近代まで存在したことを知り、様々な時代の人々が同じ場所に貝殻を捨て続けてきた光景が想像された。それらを手にした感動から、のちにゲームボードの駒にすることを思いつく。

### 作業 @祖父母の倉庫

風の強いこの地方ではあちこちの畑で防鳥カイトがブンブン飛び回っている。市販の防鳥カイトを組み立てて手に持ってみると、ちょっとの風でもグイグイと引っ張られる。鳥を操る鷹匠のようでもあり、体感的には凧揚げをしている気分になる。祖父母の倉庫にあった農作業用のヤッケを見つけ、これを素材に作ろうと決める。





4月17日(土) - 18日(日)

### 海苔下駄物見台の試作 @祖父母の倉庫

戦後の開拓でこの地に住み始めた祖父が所有する竹林で竹を刈り、展示空間の中心的存在になる海苔下駄の形を模した物見台の試作を始める。



5月13日(金)

### 石器にまつわる話を聞きに行く @南山大学人類学博物館、研究室

メンバーによるコーディネートで博物館を見学後、人類文化学科/考古学を専門とする上峯篤史先生の研究室で話を伺う。

石や石器などの「石を読む」ことで、文字がない時代の人々の移動や交流、情報の伝播の範囲などが見えてくるとのこと。人々が価値のある素材や道具を求めて、舟や徒歩ではるばる移動して採取したり、交易をして手に入れてきたことが窺えて、人類と素材と道具の関係も見えてきて面白い。また人が動くことで、文化も混ざり合っていくと。

5月21日(土) - 22日(日)

### 穴窯の手伝い @新城市

古窯跡をめぐるフィールドワークで案内してもらった陶芸家の稲吉オサムさんの穴窯の手伝いに行く。

稲吉さんの穴窯の火入れが始まり、4日間、温度や炎、煙などの具合を見ながら薪を投入し続けていく。事前に用意されたすごい量の薪を見て、当時の窯を作った場所の条件が、窯に適した地質と地形、川があって舟運の便のいい立地に加え、周囲に薪になる木々が生えていることだったのが納得。窯や薪を使い切ると、また次の場所へと移動したそう。燃え盛る炎とたなびく煙に見入る。

5月22日(日)

## 田原凧祭りの見学 @田原市

江戸時代から伝承されている田原凧のひとつである「ケンカ凧」の合戦を見に行く。

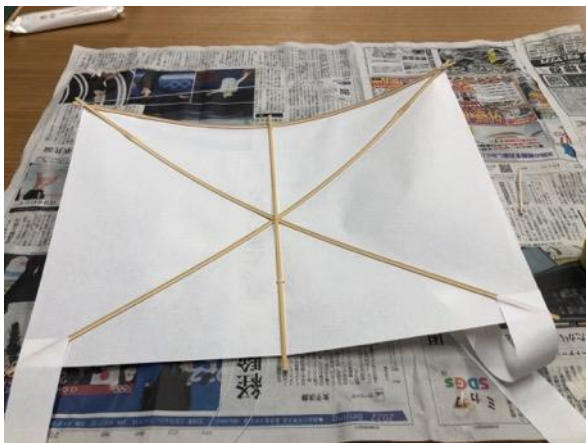
空を見ながら会場を探していると、田植えを終えたばかりの田んぼの上でケンカ凧合戦が繰り広げられていて、その大らかな光景に笑ってしまう。畦道や農道の長い直線を上手に使ってあちこちで凧を上げては空中の合戦に参加していく。ガラスの粉を付けた麻の凧糸で敵の凧糸を切って凧を落とすと勝ちとなる。かなり高くまで上がっているのに、凧たちは小さく踊っているように見える。実況中継のアナウンスが場を盛り上げるなか、風の音と、凧のうなりのブーンと鳴る音が響く。



5月25日(水)

## 凧の作り方を習う @田原まつり会館

展示用に、“鳥の形の何か”を作りたいと考え、畑でよく見かける市販の防鳥カイトの作り方をヒントに試作したが、手の込んだ作りだった割にイマイチ。突破口を求めて、田原凧作り保存会の方に基本の凧の作り方を習う。その無駄を削ぎ落としたシンプルな作りに関心し、もっと簡単な作りにはできると気づく。



6月7日(火)

## 新城市の養蚕家を訪ねる

メンバーが、新城で伊勢神宮に奉納するための蚕を毎年育てているとの新聞記事を発見し、蚕が大きくなった頃に訪問する。

新城から渥美半島を経て伊勢神宮へと続く「絹の道」が現在でも繋がっていることに感動。耳を澄ますと蚕たちがムシャムシャと桑の葉を食べる音が聞こえてくる。戦時中までは、現金を稼ぐ手段として多くの家で蚕を飼っていたため桑畑があちこちに広がっていたが、昭和の終わりにはほとんどがみかん畑に変わったそう。昔は、米、山仕事、椎茸、みかん、蚕、炭焼きと、巡る季節に合わせて常に多少の現金収入を得られるように生業をしていたが、中国の生糸に押され養蚕が廃れて、勤めに出るようになると、そうした暮らし方ができなくなったと。





6月12日(日) - 25日 (土)

展示や市に向けての作業 @ 豊橋市民俗資料収蔵室、祖父母の倉庫など

土の道標（石仏、灯籠、道祖神など）作り、採取した土片へ渥美焼の紋様などの線刻、藁縄い、地形図の書き込み、古着で撚り紐作り、切り草・ざげち作り、民話の刺繍、佇みスペース作りなど。それぞれ試行錯誤しつつ、メンバーとともに展示に使うモノや交易品を作っていく。

<海の道>の手がかりは少ないが、<陸の道>には石で作られた道標・道祖神・石仏・灯籠・灯台などが今でも点在しており、かつての人々の移動ルートが見えてくる。そこでメンバーにかつての街道をリサーチしてもらい、採取した土でミニチュアを作って地形図の上に置くことで、かつての<陸の道>を浮かび上げらせようと考えた。また、<陸の道>自体は、奥三河で作り方を教えてもらった藁縄で作ることを思いつく。

6/11に行った「結びのワークショップ」に参加してくれた子供たちが遊びに来たので、展示中に予定している「市」の練習がてら、メンバー考案の型紙を使って“切り草”づくりのワークショップをしてもらう。チラシで作ったカラフルな切り草を手にはらひらと持って帰る姿を見て、こうやってモノを介して作り方や物語が伝播していくといいなと思う。

土地の“民話”を三河木綿に刺繍したものは、身近でありつつ手間のかかる手法にしたことで、我が家でも母と叔母が活躍し、メンバーも周囲の人たちに手伝ってもらったそうで、予期せぬところで新たな才能が開花しつつ、プロジェクトの輪がじんわり広がることとなった。







6月26日(日)

### 赤引き繰糸始式を見学 @ 神宮神御衣御料所 (田原市)

伊勢神宮に奉納する絹糸を蚕から引き出して作る「赤引き繰糸始式」を見学に行く。新城で育てられた蚕が奉納され、神事が執り行われるが、前日から大雨のため残念ながら糸作りは行われなかった。

かつては渥美半島のあちこちに桑畑があり、三河で採れる蚕は良質とされ古代より朝廷や伊勢神宮に献上されていた。現在、糸繰りを行う二人の女性は、20年前にこの地で長年製糸していた女工さんから教わったそう。この神社も含め、渥美半島の神社でよく見られる境内に敷かれている扁平石について尋ねると、創建時に表浜の海岸から拾い集めて敷き詰めたという。



7月3日(日)

### 河原で石拾い @ 豊川の河原 (加茂橋付近)

蒲郡在住のメンバーの実家で使われていたみかん収穫カゴを抱えて、豊川の河原で展示に使うための石をみんなでせっせと拾い集める。河原にある石の来歴や背景、種類の豊かさを見せられるように選びつつ、各自「いい感じ」の石を選んで拾ってもらう。

途中で、明らかに硬い高い音のする石を発見。鳳来寺山自然科学博物館にあったサヌカイトの鐘を思い出し、打ち鳴らしてメンバーに知らせる。結局、他のメンバーも硬めの石を発見し、後日これらの石を連ねて「市」用の鐘に仕立てた。

持ち帰った石はすべてを洗って天日干しにしたのだが、気がつくとも男子メンバーの二人が素敵に並べてくれた。





7月10日(日) - 12日(火)

### 野焼きをする @ 稲吉さんの作業場(豊橋市)

“土を焼く”ために最近では天気次第で作業のスケジュールを決めていく。人間の都合で進められず、かつての人々の営みや自然に対する信仰心などを想像する。

前日に穴を掘り、湿気を避けるために割竹や消し炭を敷き詰めてから、その上に作ってきた土片などを並べて、枯れ木や周囲の草木を刈ってはそれらを投入し続けて数時間燃やし続けた。翌日にドキドキしながら窯開けをする。

かつては日本中どこでも、身近な粘土を採取して、薪になる木を伐採し地面に並べて土器を焼いた。今回、自分で土を採取しそれを焼いてみることで、“火”によって“土”が質的に変化するという人類の発見の大きさに改めて気づいた。火の温度が450度を超えたあたりで雨や水に晒しても溶けなくなるし、土に還らなくなるそう。私たちの身の回りにある人工物が、もともとこの星や宇宙に存在した素材を加工して作られたモノだと考えると、この「土(=素材)に還らなくなる」かどうかの境目は“モノづくり”にとってとても重要な気がする。





7月18日(月) - 28日(木)

## 搬入・設営 @ 芸術文化センター8F・J室

大まかな展示プランはあるものの、詳細は現場で決めることばかりなので、とにかく今回集めたり作ったりした見えそうなモノを全てトラックに積んで搬入。メンバーにも手伝ってもらいつつ、何をどの程度まで展示・説明・分類するかなど、運んできた膨大な素材や資料を空間に合わせて整理し、取捨選択していくことで、少しずつ展示が出来ていった。設営初日にはデザインした「ほの国」帆前掛けが届き、さっそく腰に締めてみた。



テキスト：井上 唯  
編集：雨森 信